

「農業技術の匠」： ^{おぜき} ^{じろう} 尾関 二郎 さん（ 岐阜県関市 ）

～ 個人による水稻品種「みのにしき」の育成と県奨励品種への採用 ～



尾関 二郎さん

1 技術確立の背景(目的)

昭和50年代、岐阜県関市における水稻栽培品種は「日本晴」と「ヤマホウシ」が主であり、倒伏し易くいもち病に弱い「コシヒカリ」はほとんど栽培されず、また、岐阜県の平坦地向けの奨励品種「ハツシモ」は晩生過ぎ、登熟期がやや冷涼な気象の当該地域では栽培が困難でした。

そこで、「ハツシモ」の有する大粒で良質・良食味の遺伝形質を残しつつ、「ハツシモ」より早熟、短稈を目標にした品種の育成を行うことを考えました。

2 技術概要(技術効果)

独学により水稻の交配技術を会得しました。

育種設備を全く所有していなかったため、出穂時期が異なる水稻品種の開花を揃えるためにドラム缶を利用した短日処理を行うなど、独自の工夫を加え交配を行いました。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

「ニホンマサリ」を母、「ハツシモ」を父として人工交配を行い、その後は系統育種法により選抜を行いました。育成した品種は、美濃地方を豊かな穂波が錦のように飾ることを願い「みのにしき」と命名しました。「みのにしき」は、「ハツシモ」より千粒重が重く、10日程度早熟、10cm程度短稈という特性を持っており、昭和58年に戦後初の民間育成品種として種苗登録され、昭和62年に県の奨励品種に採用されました。水稻の品種育成は、国、県が主導であり、個人により育成された品種が県の奨励品種に採用された全国初の事例です。

奨励品種に採用されて以来20年以上経過した現在でも、旧関市においては最も作付面積の多い品種であり、県内の400haで栽培されています。

また、育種技術の普及も行い、関市農業協同組合青年部を指導して水稻品種「かがりび」を共同育成しました。



写真
上からニホンマサリ
みのにしき
ハツシモ

※最寄りの普及指導センター { 岐阜県中濃農林事務所
住所：岐阜県美濃市生櫛1612-2
TEL：0575-33-4011

<技術のポイント>

個人による水稲品種「みのにしき」の育成と県奨励品種への採用

①背景

昭和50年代、岐阜県関市における水稲栽培品種は「日本晴」と「ヤマホウシ」が主であり、倒伏し易くいもち病に弱い「コシヒカリ」はほとんど栽培されず、また、岐阜県の平坦地向けの奨励品種「ハツシモ」は晩生過ぎ、登熟期がやや冷涼な気象の当該地域では栽培が困難であった。

また、自主流通米制度の下で‘売れる米づくり’が強まりつつある中、当該地域の生産者の間でも売れる米づくりに相応しい品種へのニーズは高かった。

公的研究機関での水稲育種の目標の一つに、一定規模以上の普及面積を前提とした広域適応性があり、このため地域を限定した品種育成は困難であった。

②育成目標

- 「ハツシモ」より早熟、短稈
- 「ハツシモ」並の大粒、品質、食味

③育成方法

「ニホンマサリ」を母、「ハツシモ」を父に人工交配を行い、その後系統育種法により品種の育成を行った。

独学により水稲の交配技術を会得したものの、育種設備を全く所有していなかったため、出穂時期が異なる水稲品種の開花を揃えるためにドラム缶を利用した短日処理を行うなど、独自の工夫を加え交配を行った。



尾関さん作業風景

④「みのにしき」の誕生

雑種第5代の中の一選抜系統が育種目標を概ね達成したことから、美濃地方を豊かな穂波が錦のように飾ることを願い「みのにしき」と命名した。この「みのにしき」は、「ハツシモ」より千粒重が重く、10日程度早熟、10cm程度短稈という特性を持っていた。

昭和62年度岐阜県主要農作物奨励品種特性表から抜粋

品種名	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	千粒重 (g)	品質	食味	倒伏の 難易
みのにしき	10.17	86	26.3	上 の 下	上 の 上	や や 易
ハツシモ	10.29	93	24.9	上 の 下	上 の 上	易

⑤県奨励品種への採用

昭和58年に戦後初の民間育成品種として種苗登録され、昭和62年に県の奨励品種に採用された。水稲の品種育成は国、県の試験研究機関によることが多く、民間の一人によって育成された品種が県奨励品種に採用された全国初の事例である。

⑥奨励品種採用後の普及状況

岐阜県内での作付面積は平成13年の593haをピークに、奨励品種に採用されて以来20年以上経過した現在でも、400haで栽培されている。とりわけ旧関市においては、現在でも27%を占め、最も作付面積の多い品種であり続けている。

また、育種技術の普及も行い、関市農業協同組合青年部を指導して水稲品種「かがりび」を共同育成した。

